

競技会レポート — 我々は、かく戦い、そして敗れた —

1. 同立戦

3年生 福本貴則

振り返れば1回生の頃、全国大会があるのをまだ知らなかった僕は、同立戦で輝く先輩達の姿をみて、早くこの舞台に立ちたいと思い日々の訓練に励んだ。

月日が経ち、まだ発数の少ない2回生でこの同立戦のⅡ部競技に出場することができた。もちろん優勝する気で望んだが、満足のゆく結果は得られなかった。しかし、同じくらいの発数であった選手が見事優勝を成し遂げた。同じチームの選手であったのですごく嬉しかったが自分の技量に納得ができず、ものすごく、悔しくて部活を辞めようと思えた。今まで経験してきたスポーツでは誰にも負けたことがなかったので持っていたプライドが一気に粉々に砕け散った。でも、素直に現状を受け止め、新たな目標を持ちひたすら飛びまくった。

それから、ソロにも出ることができ3度目の同立戦を迎えた。今回は同志社が主管校であり主将でもあった僕は準備や運営で競技どころではなかった。回りのみんなからは優勝して当然だとプレッシャーをかけられる中、競技会が始まった。

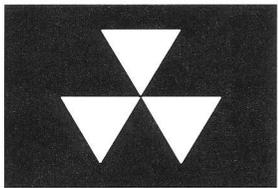
1フライトで8の字旋回、ノーマルストール、180蛇行、急旋回と4つの課目をこなさなければならぬ、2回のフライトの1ラウンド勝負、1フライト目の自分の順番がまわってきて、いっき

に緊張が僕を襲った。そんな中、無事に4つの課目を終え、去年と違う自分を実感した。そして、喜び気が抜けて着陸を失敗した。喜ぶ前に自分の欠点である集中力のないところを早く思い出すべきであった。

2フライト目のラストフライト、着陸するまでは、絶対集中すると言い聞かせながら上空へあがったが僕の集中力を乱す敵が現れた。まずはサーマルである。課目を終え、すばやく帰ってきた僕にすれば、邪魔であった。課目終了した時点で高度500mもありしかたなくプラス2~3のサーマルを味方につけ急旋回をし続けた。すると新たな敵が現れた。鳥である。僕をバカにするかのように寄ってきて逃げていった。非常に怖い思いをしたがその後、着陸もバッチリ決めⅡ部競技が成立した。ピストであった僕はみんなよりも先に競技の結果を知ることになった。みんなの期待に応え、優勝することができた。運営などで競技にあまり深く考えられなかったことが、逆に自分にとっては良かったのかもしれない。

今回の同立戦では多くのことを学び、非常にいい経験が出来たと思います。協力して下さいの皆様、本当にありがとうございました。今後もまた、伝統のある「同立戦」をよろしく願います。

8勝 **通算成績** **19勝**



VS

RITS

(4引き分け)

2. 新人戦

2年生 茶田 紘 史

私は今回、新人の大会と謂えども、初めて全国大会というものに出場しました。先輩方が妻沼で全国各地の大学の選手と戦われているところは見ていましたが、まさか自分がそれに匹敵するくらい大きな大会に出場できるとは思っていませんでした。

大会初日は、慣れない土地や運航体系に悩まされたのか、関東勢の点数は、予想していたよりもはるかに低いものでした。そのせいもあってか、団体・個人共に東海・関西勢が上位を占めるといった状況でした。

その一方で、私個人の成績は43人中36位と、お世辞にも良いとは言いがたい成績であり、初日からつまづいた形になりました。その原因はいろいろありますが、一番際立っていたのが速度の管理でした。なかなか決められた位置に水平線を持っていくことができず、悪戦苦闘を強いられました。2回生の10月にもなって、このような初歩的な操作もできない自分が悔しく、その夜はひたすらイメージフライトを重ねていたような気がします。

その成果もあってか、翌日からは、多少の速度むらはありませんでしたが、初日に比べるとかなり速度が安定し、自分がイメージするフライトに一歩近づけたといった感じでありました。

しかし、速度の安定と共に、空中での課目の組み立てという新たな問題に直面しました。上空ではその時々によって、風の向き・強さが変わるので、どこで、どのような課目を、どの方向に向かって行くか判断を下すのは、容易ではありませんでした。そこで、私は地上にいる間に、あらか

じめ風向・風速をチェックして、できるだけ上空での負担を軽くするよう努めました。その結果、若干、上空では楽になりましたが、それでも沈下にはまったり、気流にあおられたりして、なかなか自分がイメージするフライトができませんでした。

一方、その頃関東勢は地形にも慣れ始め、風などにもうまく対応し、着実に点数を上げており、関東勢の適応能力は恐るべきものでした。

そして、その後も数ラウンド競技が行われ、結局、大会全体を通して8ラウンドが成立しました。同志社の結果はと言いますと、19チーム中16位という、なんともお恥ずかしい結果となりました。この結果には、一緒にチームを組んでいた小寺もかなり落ち込んでいましたが、ある意味で、これは自分達の実力を知り、次へつながらる良い機会になったのではと今では思っております。

最後に、この大会に出場するにあたり、ご声援をいただいた、監督・コーチ・部員・OB・OGの皆様には、この場を借りて厚く御礼申し上げます。



3. 第4回関関同立グライダー競技会

3年生 重田心平

関関同立戦。まだ歴史の浅いこの大会ですが、これまで同志社はまだ1勝もしたことが無く、そろそろ勝っておきたいところです。10月にライセンスを取得したばかりの私と岩井にとっても初の本格的な競技参加となり気合が入っていました。といってもまだ手元にライセンスが届いていない我々は練習生扱い。単座機での競技は許されません。結局今年も単座機で参加できるのは4回前田先輩のみ。

各校の占有機である4機の単座(関学はライセンスがないため複座のASK13を使用)と共有機である2機の複座(ASK21)を用いて競技を行う規定となっているので、複座乗りはあまり発航順がまわってこないルールです。そんな中、集合日に耐検整備中の自校機、ASK-23 アイオンに代わって同志社占有単座として使用する予定だった木曾川常駐機体の府大23の書類不備が発覚。飛行ができない状態にあることが分かりました。とり急ぎ別の機体の準備を進めますが、とにかく初日は複座機1機で戦うしかありません。最悪の状況の中競技会は始まりました。

DAY1

運の悪いことに初日からいきなりの好条件。昼前からサーマルが出始め、開会式終了後さっそく競技が始まりました。競技規定の関係から単座機の無い同志社の発航権は他大の半分以下。しかしとにかくやるしかありません。同志社1番手前田先輩がASK21に搭乗し発航順を待ちます。そんな中さっそく立命の一番手、片岡先輩がディスクで文化センター→木曾川宿舎のタスクをコンプリート。地上で出発を待つ選手にも気合が入りま

す。しかしここでまさかのウインチトラブルにより発航停止。修理が終わり、ようやく発航再開となりましたが好条件のタイミングを逃してしまいました。前田さんの1発目は滞空点のみ終わってしまいました。その後、各大学とも滞空点を獲得していきますがなかなか発航権の回ってこない同志社はイライラを募らせませす。前田さんの2発目も不発に終わり、その後重田と岩井も1回ずつ飛びましたがやはり不発。もはや得点できる条件は残されておらず競技終了となりました。

この日は立命が片岡先輩に続いて2番手片山先輩も周回し1700点を獲得。関学・関大も複数の選手が滞空点を獲得し、同志社は大きく遅れを取ってしまいました。自分達の準備不足を呪いながらも明日に向けて別の単座機を使用する手筈を整え望みを繋ぎました。

DAY2

朝から同志社の単座機として使用する名城23を準備し競技開始を待ちます。

昼頃、渋い条件ながらも競技が開始されましたが、立命片山さんがわずかな滞空点を獲得したのみで、すぐにサーマルも無くなり競技終了。同志社は前田さんが複座で1回・単座で2回、重田が複座で2回飛びましたが無得点に終わりました。

DAY3

空は雲に覆われ競技が行われるような条件は見込めそうも無く、昼過ぎまでクルーフライトを続けていましたが、やがて雨が降り出し撤収。ノーコンテスト。

DAY4

この日も条件に恵まれず訓練飛行のみ。競技は行われませんでした。

DAY5

この日は前田さんが教証試験の手伝いに福井空港へ行っているの、またしても同志社は単座機が使えず発航権が半分以下。不利な状況の中、昼頃から弱いサーマルが出始め競技開始となりました。

競技開始早々、複座機に搭乗した立命川端先輩が滞空し始めます。まずい…複座で粘られるとますます同志社の発航権が少なくなる。この日一番手で上がった岩井も撃沈、代わって重田が搭乗し発航順を待ちますが、なかなか回ってこない発航権にイライラしてしまいます。

待つこと1時間、ようやく出発。すると離脱後すぐ、サーマルを感知。いける！すぐさまバンクを入れようとエルロンを使いますが、意に反してのろのろとロールしていくASK21。くそ、単座機が使えたら…。反応の遅さをもどかしく思いながらも必死に操作しますがバンクを入れ過ぎ失速に入る始末。

地上から高度を聞く無線が入ります。次の機体が離陸するのでしょうか。

「高度490。」少し上がった。

「その位置なら大丈夫です、発航する機体に注意してください。」

「了解。」

少し風下に流されていたのが幸いしました。落

ち着いてサーマリングに集中しますが、どうもコアがはっきりしなく、ゆるいバンクでガラガラ回った方がいい様子。そのまま粘っていると、先ほど離陸した557が別の場所にサーマルを探しに行行って撃沈したらしく、私の下に入ってきました。(ここに来てそんないいサーマルじゃないぞ…)などと思っていると、案の定557はすぐにブレイクし、着陸してしまいました。私はそのまま20分ほど粘って着陸。滞空点は4点。(もっと高い高度から丁寧に回っていればもう少し上がったはずなのに…)ひとまずこれまでの鬱憤を晴らすことは出来ましたが、自分の技術の無さも痛感する結果となりました。

その後は福本と岩井に交代し団体得点の追加を狙いますが、結局追加点を得られないまま競技終了となりました。この日は後半ディスクスに乗り換えた川端さんがスタンダード機の足を活かして、トップの低いサーマルを次々と渡り歩き2時間半のビックフライト。旋回点には到達できなかったものの4回生の意地を見せました。関大・関学も若干滞空点を追加しほとんど差をつめることは出来ませんでした。

DAY6

朝から静穏が続き、絶好のソロ日和。競技は行われませんでした。

DAY7

最終日も結局競技は行われず同志社の2年連続4位が決まりました。

最終結果

団体

1位	立命	1793.9点
2位	関大	19.5点
3位	関学	10.0点
4位	同志社	5.0点

個人

1位	片岡(立命)	900.0点
2位	片山(立命)	805.4点
3位	川端(立命)	78.5点
...		
8位	重田(同志社)	4.0点
12位	前田(同志社)	1.0点

全く何と言っていいのか、到底受け入れられない不甲斐無い結果です。今回は準備段階で既に負けが決まっていました。ライセンスで無ければ単座機を使えないことを分かっていたながらライセンスが間に合わなかった私と岩井。ライセンスでなくても使える関学占有複座の存在。そして何より絶好のチャンスであった初日に書類不備で飛ばなかった府大23。反省すべき点は多いです。

飛ばずに負けるというのは本当に悔しく後味の悪いものです。ただ、この失敗を活かし悔しさをバネにして次こそはかならず初優勝を成し遂げようと思います。来年の同志社にはそれが出来るはずです。それまでは、この悔しさを忘れずに精進あるのみ…

これまでの成績

回	優勝	2位	3位	4位
1	立命館	関西大	同志社	関学大
2	関西大	立命館	関学大	同志社
3	関西大	関学大	立命館	同志社
4	立命館	関西大	関学大	同志社

4. 東海・関西競技会

4年生 前田 賢一

2006年度は東海関西競技会団体4位、個人2位という成績を残した同志社でしたが、今年は同志社にとって非常に厳しい競技会となり、団体8位、個人8位という結果になりました。今年は8校10チーム(昨年は8チーム)が参加し、そのうち8チームが全国大会の切符を手に入れることができます。同志社は前田、岩井、重田の3人チームで出場し、辛くも2年連続の全国大会出場権を得た次第です。

競技は2007年11月10日から18日の間行われ、前半は天候や条件が整わず各チームがほとんど得点できない状況が続きます。競技が大きく動いたのは11月16日(6日目)でした。その日はヘリのCAB試験が木曾川付近の空域で行われていたため、11時ごろから競技が始まりました。曇り空でしたが、朝の太陽光の影響か一発目から滞空が開始、私も1番手として数分遅れて発航しました。離脱後すぐに+1程のサーマルがあったため回りだしますが、沈下もあり高度が獲得できません。その間に先上がった機体から第1旋回点通過の無線が入り、内心焦りましたがその時の状況ではその高度を維持するのが精一杯でした。すると、地上から次の機体の発航する旨の無線が入り、そのサーマルをブレイクして西側に向かいますが沈下に叩かれ、再びチェックポイント周辺で粘りますが、高度を回復させることができず着陸。約21分のフライトで滞空点11点を獲得しましたが、同じ時間に飛行していた1チームが周回、3チームが1ポイントゴールし、その後1チームが周回をしたため、同志社は大きく差を開けられてしまいました。各チームとも1フライトのチャンスを生かすか殺すかの戦いでしたが、その中で得点できなかったことは非常に悔しい思いでした。

この6日目を終わった時点で同志社は8位。全国大会出場ラインぎりぎりの位置でしたが、9位と10位には実力を備えた選手を擁する立命と関大のチームがいたため、全国大会出場が安心できる状態では全くありませんでした。そして残りの2日間はこの8位を守るための戦いでした。残りの2日も周回のできる条件は出ず、粘れば滞空点がなんとか期待できる条件だったため、滞空点を狙い必死に飛びました。惜しいところまで粘っても滞空点を獲得できない状況が続くだけに、精神的に非常に厳しいものがありました。

そして8位のまま迎えた最終日。結局8位を争う同志社、関大、立命チームとも大きな得点を得ることができなかったため、なんとか同志社が2年連続の全国大会出場切符を手に入れることができました。

この大会は6日目以降、精神的に本当にきつかった。いつ逆転されるか分からない状況、2番手以降の岩井、重田に発航をほとんど回すことができない申し訳ない気持ち、そして自分が30人を超える部員の先頭に立っていながら、ここで全国大会を逃すと近年の上昇機運に水を差すのではないかという不安。これらが入り混じった心理状況でも前を向いて頑張って戦えたのもチームメイトの2人や、部員みんなの応援があったからだと思います。

そのような周りの状況に影響を受けて戦っていたのではエース失格な気持ちも自分では持っていますが、この東海関西競技会は精神面で鍛えられ、自分自身の経験としてもプラスになったと思います。

6年ぶりに全国大会に出場した2006年度は中村、前田の2人チームでしたが、2007年度は3回生の

岩井、重田がライセンスを取得し、3人で競技に臨む態勢をとることができました。今の3回生は3回生秋までに2人以上はライセンス取得者を出すことができる流れが同志社航空部内で整った最近では初めての世代です。そして現在の1、2回生を見てみると、今後も継続して3回生の夏には各学年から2人以上のライセンス取得者を出す流

れができてきたと思います。私は卒部となりますが、今後より一層の同志社大学体育会航空部の発展のため、現役が主将を中心に一致団結して盛り上げてほしいと思います。大きく飛躍するためのポテンシャルが今の航空部にはあると確信しています。

そして、4年間をふり返って

1. 私と同志社航空部

航空部に入部して4年目、周りを見渡すと立派に成長してくれた3回生、最近やけにしっかりしてきた2回生、先輩たちを押し分けんとパワー漲る1回生、そして欠員が出たものの気心知れた同期4人。30人を超すメンバーで構成された現在の航空部を見ると、自分達がやってきたことは間違っていなかった確信できます。

私が入部したとき、実質、上回生は4回生2人、2回生6名程度、そして私たち新入生は6名でした。当時まで航空部は人数が非常に少なく、私の1つ上の世代(2007年卒生)が久しぶりの大量(?)入部だったのでしょう、部の運営自体は一昔前や現在と比べれば、かなりずたずたな状態だったと思います。混沌を極めた学校会計、他校にお世話にならなければ合宿すらできない状況。その様な中、中村兵馬先輩をはじめとする2007年卒生が2回生から部の中心となって立て直しを始め、私たち1回生は必死に付いていくことしかできませんでした。「もう少し後に同志社航空部に入れればどれだけ良かったろうか…。」必死にやってきた先輩方はもちろん、2008年卒生の誰もが思ったことではないでしょうか。私も一回生のとき同志

社航空部が他の航空部よりかなり劣っていると感じることはあったし、正直失望した時もありました。

でも、好きなグライダーを組織のせいとやめるなんて悔しいし、自分で変えてやる、今の先輩と自分達ならきっとできると強く思いました。そう思えたのも先輩の頑張りを肌で感じていたからだと思います。

部の運営も正常化に向かい始めた2回生時、私は副将という役を預かり、私たち同期の目標は「合宿運営正常化」でした。新1回生を10人ほど迎えたにも関わらず、同志社に合宿係は車係り以外おらず、「今年のうちにウィンチ、リトリブ以外の係を自分達の世代から作ろう」と他大学の人をお願いして係の仕事を学びました。そして、同立戦の主幹校としての役目を果たすため、2、3回生で何度も福井空港に足を運んだことを思い出します。

3回生になり、また新たな1回生を多く迎えることで同志社航空部は30人近くの部に変貌を遂げていました。その中で主将という命を受け、その時目標として掲げたことは東海関西競技会への出場とOBとの連携強化でした。競技の面では中

村先輩とともにライセンスを取得し、まずは久しぶりの東海関西競技会出場を決め、嬉しいことに同じく6年ぶりの全国大会出場も達成することができました。またOBとの連携強化においてはHPの積極的な更新、活動日誌(ブログ)の設置をし、情報提供をすることでOBと現役の距離を縮められないかと努力したつもりです。そしてもうひとつ目標としていたことは、同志社大学航空部員の意識改革でした。私が1回生のときから航空部としての活動内容は急成長を遂げてきましたが、OBの方々から話を聞くなかで、体育会航空部、戦う集団としての一人一人の意識、部の雰囲気本来あるべきものと違うのではないかということ強く思ってきました。これはすぐに達成できる事ではないですし、これからの主将を中心として『よい同志社大学航空部』を作っていくって下さい。

主将を終えた4回生。またまた新たな一回生を14人も迎え、後輩たちのフライトやその他の活動に対する並々ならぬ熱意を感じています。更なる同志社航空部の発展を期待してやみません。

最後に今後の主将に一言。事務処理や定例の仕事は誰でも出来ます。それ以外に何をやるかが重要です。やればやるほどしんどい役ですが、あなたのカラーを出して部を一步先に導いてやってください。

2. 私とグライダー

1回生の犬野滑空場での体験搭乗が決定づけた私のグライダー歴ですが、400発を超えても飛ぶ毎に空を飛ぶ素晴らしさを身にしみて感じることができます。バッタフライトでも、5時間以上の滞空でも、競技フライトにおいても、グライダー

で飛ぶことの素晴らしさは変わりません。その中で、一番グライダーをしてよかったと感じることは、自分を見つめることができたことだと思います。1フライト毎に目標を立てて飛び、フライト後に反省して自分を戒める。この繰り返しだったような気がしますが、今の自分を少しでも改善していこうとする行為が今後役立つのではないかと考えています。そして、自分も気づかず天狗になっていた時期に「うぬぼれているんじゃないか?」と2回も講評して下さった田口教官には感謝しています。今後、社会に出ても気を付けます。

航空部を離れても、何らかの形でグライダーと関わりたいと考えています。現役のみんなも是非ライセンス取得以上を目標に頑張ってください。技量が上がるほど、新たなグライダーの世界が見えてくると思います。

グライダーを通していろいろ教えて下さった教官方、特に教証でお世話になった田口教官、監督として見守って下さった森川監督、一番多く指導いただいた宮地教官、そして玉井教官、三田村教官、本当にありがとうございました。

3. 私と仲間

この4年間一緒にやってきた同期や先輩、後輩との出会いは私の大学生活において、一番の幸運だと思っています。

同期のあやひと、カンジ、まさひろ、ゆき、途中退部となった細井さんには本当に感謝しています。それぞれが自分のポジションで頑張ったからこそ今の航空部があると思います。ありがとう!

3回生には、1回生であまり発数を回せずすみませんでした。しかし特異な団結力でしっかり役目を果たしてくれたからこそ、今の航空部がある

と思っています。4回生になってもしっかり部を監視し、中心の一角を担ってください。

2回生は次期幹部としての役目が決まったあたりから、よりしっかり者になってきたと感じています。不仲説もありましたが、人数が少ないからこそ団結して頑張ってください。

1回生の勢い、パワーは近年の航空部において最強ではないかと思っています。他の航空部にはフライト面で発数の多い数人が目立っているとは思いますが、1回生の皆がしっかり者で頑張り屋なので、これからも航空部改革をよろしく願います。期待しています。

そして、航空部の立て直しを牽引して下さった2007年卒の先輩方。先輩の努力があってこそ、私や今の現役がそれ程大きなストレスを感じることなく活動できたと思っています。私にとって本当に最高の先輩達です。また、私が1回生の時の4回生だった河合先輩、西川先輩。先輩達が少人数の状態ですべてをつないで下さった苦労を考えると、大変なものだったろうと思います。指導していただきありがとうございます。

最後に、いつも私たちを見守って下さったOBの方々。金銭的な援助や、お会いしたときの励ましの言葉、本当にありがとうございました。この文章では近年の航空部の困難な状況を書きましたが、それ以前のOBの努力で同志社航空部として活動できていると感謝しています。今後ともよろしく願います。

4. 最後に

こうして4年間を振り返ると、もちろんグライダーが楽しくて航空部の活動をやってきたわけですが、それも含めて航空部としての活動全てが自

分にとって大きなチャレンジであったように思います。そして航空部から得た様々な経験はこれから生きていく上でも大きな財産になると思います。

「もう少し後に同志社航空部に入ればどれだけ良かったろうか…。」いつか思ったこのフレーズは今の私にはありません。あんな状況だったからこそ、こんなに大きな経験をすることができたと前向きに捉えています。

後輩のみんなやこれから入るであろう未来の航空部員には、辛かった過去の状況を書くことで、少人数で部を守った先輩、部の存続の危機から今の状況になるまでの努力が過去にあったことを知ってほしいと思っています。そして今、この文章を読んでいるキミがいる同志社航空部はどうでしょうか？グライダー活動はもちろんのこと、組織としての同志社航空部の更なる発展を心から祈っています。

前田君は、本年3月1日から開催された全国大会に出場、9日間を善戦した後、3月26、27日に教育証明実地試験(福井)に臨み、見事合格しました。

5. 第48回全日本学生グライダー選手権大会 3年生 重田心平

一度も飛ぶことなく終わった東海関西。こんなはずでは無かった。岩井と共に夏休み以来ひたすら木曾川に籠もり、様々な犠牲を払ってようやくライセンスを取得した。全ては競技会で戦うため。だが結果は屈辱の団体8位。悔しかった。だがまだ終わってはいない。そうだ全国がある。我々を全国に連れて行ってくれる前田先輩に感謝した。まだリベンジのチャンスはある。

それからというもの私の競技に対する意気込みにさらに火がついた。EVE裏合宿後のトレセンにも同志社から一人長期間参加し、自力で旋回点もクリアした。サーマルポイントの把握や地図作りの為の情報収集、ガグリング、渋い条件で粘る事、上昇風帯・沈下帯の出入りを体と風の音で感じる事。多くを学んだ。

ナロメインでもとにかく飛行時間が惜しく、毎日少しでも長く浮こうと133kmの三角コース周りを終えたあともすぐには着陸せず、日が落ちるまでひたすら渋いサーマルで浮き続けるように努めた。出来ることは全てやったはずだ。

妻沼での経験では不足していても、サーマルでの上がりに関しては絶対の自信があった。実際トレセン・ナロメインでは立命のディスクスに競り勝っていたし、大会直前での木曾川合宿では2時間滞空にタスク2.5周のスピードトレーニングとより実戦的な練習が出来た。サーマルを感じる体の感覚や直感なども本当に充実した状態で大会を迎えられ、自信を持って競技に臨むことが出来た。今年は勝てる！

DAY1

天気：晴れのち曇り

風：午前には正対風6m/s、午後から背風。

タスク：給水塔→千代田(24km)

上空には十分に寒気が入っており午前中から好条件が出始めるも正対風が強く各機ともなかなか前に進めない様子だった。2番手の私は1番手である前田先輩が得点するまで、機体監視に徹し必要な情報を1stパイロットに与えることが役目だ。同時に各校のエースの飛び方を観察し研究する。自分の出番が回ってきた時のために。

風が段々と弱まって各機周回し始める中、15番目の発航順で離陸した前田先輩は一時900mまで高度を上げるが惜しくも給水塔到達はならず着陸。2発目も得点できずに終わってしまった。

この日は15選手が得点、慶應YSは1.5周さすがだ。悔しいのは阪大や龍大Bといった東海関西の3回生が得点していること。同期の選手が活躍しているのを見ると気持ちが抑えられなくなる。「飛びたい！」

DAY2

天気：晴れのち曇り。

風：午前には背風、午後から背風。

タスク：給水塔→千代田(24km)

午前は逆転層に覆われ渋い条件。午後に低気圧の南下に伴って寒冷前線が通過する予報だった。同志社1発目、得点できるような条件では無かったので前田先輩に頼み込んで飛ばせてもらった。各校6分程度で着陸していく中、赤屋根と水門で粘って9分の飛行。とりあえず満足。

午前中は各校とも周回に至らなかったが、午後

の寒冷前線通過後上空に入ってきた強い寒気の影響で状況は一変。一気に条件が上がり各機凄い勢いで周回し始めた。前田さんも2発目に最終発航ぎりぎり離陸し周回達成。最終的に16選手が得点。あまり他校と差を詰める事は出来なかった。

同志社 795点 団体12位
前田 795点 個人14位

DAY3

天気：晴れ。

風：正対風。

タスク：高山→千代田(32km)

ゆるい西高東低の中、昨日に引き続き上空は寒気に覆われていた。朝から十分な日射もあり好条件が期待されたので、タスクは高山→千代田の△32km。同志社の発航順は15番。この順番が見事にはまり丁度条件が良くなった時刻に前田先輩が離陸した。同時期に上がった立命ディスカスと上空でサーマルを取り合いながらも見事周回達成。この時点での周回しているのは日大8K、立命ディスカス、同志社23(23の意味はASK-23こと)の3チーム。

ようやく私の出番だ。初めて選手としてのチャンスを与えられた。この機を逃すわけにはいかない！立命ディスカスの2番手に続いて離陸。あらかじめ目星をつけていたポイントでサーマルにヒットし一気に1400mまで上昇。高山を1000mでクリアした後、富士重上空で再び1400mまで上がりななおしたがこれが無駄だった。サーマルで上がるまでもなくその先のルートはほとんど沈

下がなく速度をつけて千代田を1000mでクリア。そのまま180km/hでファイナルをかけてゴール手前で350から引き起こし400でゴール…のはずが、ゴール判定はNoGood。引き起こしが遅かった。未熟…。しかしついに競技会初周回。しかも13時台に離陸した機体の中では一番速い！今まで胸にたまっていたモヤモヤが一気に晴れた気がした。

しかもこの時点で2周目を達成しているのは日大8Kと同志社23の2チームのみ。3番手の岩井に期待がかかるが、惜しくも1発目は不発。そして最終発航ぎりぎり離陸した岩井の2発目。粘りのフライトを見せる岩井に応援する側にも熱が入る。そしてついに「同志社23、まもなく高山クリア」の無線。帰ってきた岩井を興奮気味に迎えたが、話を聞くとカメラのセットミスで結局写真撮影できなかったとの事。詰めが甘さがなんとも岩井らしいが、みんなで悔しがりながらも同志社23チームの可能性を感じずにはいられなかつた。

この日は結局41選手が得点。日大8K、慶應A・B、早稲田A・Bが3周した。

同志社 2574点 団体10位
前田 1730点 個人12位
重田 844点 32位

DAY4

天気：晴れ時々曇り。

風：午前正対風8m/s、午後から正対風10m/s
越え。

タスク：給水塔→千代田(24km)

典型的な冬型の西高東低の気圧配置に依然とし

て上空を覆う寒気。好条件が期待されるが風が強い。午前中から各校が周回し始めるが前田先輩の1発目は不発。2発目はうまく条件が当たりなかなかの好タイムで周回を達成。私に出番が回ってきた。北風はさらに強さを増し、上空は雲に覆われはじめていた。離脱後すぐR/W左へ向かいシスコの風下で数周大きくサークリングすると強いサージを感知、すかさず速度を抜いてバンクを入れる。全周+。そのまま上がってR/Wエンド南高度1000。風下に流されすぎだ。もっと風上で上げられるサーマルを見つけなければ駄目だ。ブレイクし風上を目指すが風が強くなかなか進まない。思い切って速度をつける。R/W北1kmで再び強いサージを感じプルアップ。そのままハイバンクを入れると一発で全周+に入った。これで上がり直せばいい…。そのはずだった。600~900まで上がり直す間にまた流されて気が付くとウインチがすぐ近くに見えた。わけもわからず焦る。「名大ディスクス準備よし」の無線が聞こえた。もっと風上へ行かないと…。サーマルアウトし再び風上を目指す。高度700。これ以上は進めない。工場地帯に進路を変えサンヨー上空で弱いサーマルを見つけるが半周+1半周-2。もう戻らないとまずい。風に流されてR/Wに戻りながらサーマルを探すも頼みの綱の赤屋根もヒットしない。水門奥高度250で弱いサージを感知。すかさず速度を抜くがバリオは0から上に振らない。駄目だ。回れない。そのまま場周。低空進入でピストに呼び出され、注意を受けた。いいことなし。「立命ディスクス給水塔クリア650」の無線が聞こえた。

自分でもなんでこんな結果になったのか分からなかった。とにかく前に進まないグライダー。進んでも進んでもすぐ風に押し戻され、次々と上

がってくる後続の機体にプレッシャーを感じる。それでも気にせずコツコツ前進していけばよかったのだが、焦って早く進もうとした結果がこれだ。同時期に上がった早稲田と法政の23が周回していた。(周れるはずだった…)自分の犯してしまった失敗に愕然とする。何としても3番手の岩井に回さなければいけなかったのに…。

次の発航。おそらく今日最後。風はさらに強さを増し、スタンダート機ですら給水塔に辿り着けなくなっていた。(着陸時に地上の風が12m/sと言っていたから、上空は20m/s以上あっただろう)。しかしとにかく1ポイント。必ず給水塔に行ってやる。先程の失敗を繰り返さないように、自分にコツコツ、コツコツ、堅実に、と自分に言い聞かせて離陸した。条件は渋くWT上空は混みあっていたが、足の無い23で他のポイントを狙いに行ける状況では無かった。離脱後すぐ弱いサーマルにしがみつく。同高度の慶應YS・東海6に囲まれ身動きがとれない。セパレーションを注意されないように必死にバンクを入れ、全力で旋回半径を絞る。次の機体もどんどん上がってくる。しかしこのポジションを譲るわけにはいかない。少し上がっている。上手くサーマリングを続けたまま、渋滞地域を抜け出せた。よし！今度は絶対失敗しない。再び高度1000。R/W南2km。丁寧にドルフィンで風上を目指す。やはり全然進まない。500mゲインしてもとの場所から1km進めるかどうかという状況だった。次のサーマルにヒットし回るがどんどん風に流されふと気付くとまたR/W横。そんなことを延々と繰り返した。ダメか…。競技発航終了の無線が入る頃には、もう上空には浮いている機体はほとんどいなかった。それに気付いた瞬間、緊張の糸が切れてしまった

のか一瞬帰ることを考えてしまう。一度そうなる
と脆いもので、じわりじわり高度を失い場周に入
る。最終着陸かなと思ったが、まだ一機上空に
残っていた。私の少し前に離陸した慶應 YS の 3
番手だ。彼はまだ諦めていなかった。結局最後の
彼も周回には至らなかったが、私は気持ちで負け
てしまっていたように思う。

この日は30選手が得点。早稲田 LS は 3 周して
いた。

同志社	3500点	団体11位
前田	2659点	個人11位
重田	844点	39位

DAY5

天気：晴れのち曇り。

風：10：30～14：30 正対風 8m/s 越え。14：30～
正対風 3m/s。

タスク：高山→千代田(32km)

条件は良いものの朝から風が強くやはり各機苦
戦している様子。強風の中各校のスタンダード機
が周回し始めるが、Ka6・ASK-23 は一向に高山
まで到達できる気配が無い。「明らかに運営のタ
スク設定が間違っている」地上のクルーの間でも
不満がこぼれる。しかし各校の B チームを除けば
スタンダード機を持っていない学校の方が少数な
ことを考えれば仕方ないのかもしれない。午後か
ら次第に風が弱まり Ka6・ASK-23 も周回し始め
る。前田先輩も 4 発目で周回。次に私が飛べるか
どうかはギリギリのタイミング。条件はかなりい
いようだ。昨日の雪辱を晴らすために飛べると信

じて準備するが無情にも私の一発前で発航終了。
またしても悔しい思いをした。

30選手が得点したが各校のスタンダード機が 3
周する中、ASK-23・Ka6 のほとんどは 1 周しか
できなかった。スタンダード機の必要性を認識せ
ざるを得ない 1 日だった。

同志社	4324点	団体12位
前田	3480点	個人10位
重田	844点	42位

DAY6

天気：晴れのち曇り。

風：10：30～11：30 背風 1m/s 11：30～正対風
3m/s。

タスク：高山→明和(37km)

風も穏やかで上空には十分な寒気。タスクはま
さかの 37km。午前中から各機滞空し始め粘りの
フライトで周回していくが、前田先輩はあと一歩
のところまで周回に至らず 4 発目まで不発に終わる。
ノックダウンしてしまった前田さんに代わり私が
搭乗することになったものの空は雲に覆われ始め、
R/W 周りの日射は完全に遮られていた。スタン
ダード機はまだ陽の出ている R/W のはるか南ま
で行って上がっているが、ASK-23 にそこまでの
足は無い。23 の行ける範囲の空気は全て冷え切っ
てしまっているようだった。案の定、サーマルに
ヒットせずにすぐに場周。今大会初めてのバッタ
フライト。他の 23 や Ka6 も苦戦しているよう
だった。そんな中、スタンダード機のチームは
次々と 3 番手が周回。宿敵立命も 3 周を達成する

が、同志社は結局無得点。また胸にモヤモヤしたものがたまりだした。

この日は最終的に34選手が得点。

DAY7

天気：晴れ。

風：午前 正対風 5m/s。14：00～正対風 2m/s。

タスク：高山→千代田(32km)

本当に渋い1日だった。粘りに粘った6選手が得点。同志社は前田先輩が3発飛んだが得点できなかった。

DAY8

天気：晴れ。

風：南風 2m/s。

タスク：千代田→給水塔(24km)

いよいよ最終日。南からの暖気が入ってすっかり春の陽気となってしまった妻沼。上空の空気も暖められてしまい、渋い条件が予想された。朝から弱い南風が吹き、今競技会始めてのピス更。RW14からの発航となった。日射のおかげで地上気温が上がり昼前からしだいに浮く機体が出てきた。

今大会最後の発航となるであろう同志社の2発目、前田先輩に呼ばれる。「重田お前が行け。」今大会最後の発航は後輩に託すつもりでいた—そう言われた。今大会なかなか飛ばずに鬱屈としていた私の気持ちを汲んでくれたのか、来年の全国へ繋ぐため最後の1発を譲ってくれたのだ。

出発前に早稲田のLS、立命ディスクスが千代田をクリアする無線を聞き、「必ず得点してやる！」とこれまで必死にやってきた総てを見せるつもりで離陸した。きっと前田先輩ももう一度飛びたかっただろう、せつかく譲ってもらった最後の1発無駄にするわけにはいかない。

離脱後、場周付近で粘っている日大8Kの上を飛び越えて離陸前に前田先輩と確認したサーマルポイント「名無し工場」へ向かう。そこで弱いサーマルにヒットし丁寧に高度をあげ他の機体で混んでいるサントリー上空を避けて田の字上空へ。小さなサーマルにセンタリングして高度650まで上昇、あまり上がりは良くなかったが焦ってサーマルを無駄に捨てる愚かさは今大会で嫌というほど思い知っていたので、コツコツ高度を稼ぎ750まで上昇。そのまま千代田を目指し「同志社23まもなく千代田クリア」の無線を入れる。手堅く千代田を写真撮影し、今度は他の機体がいなくなったサントリー上空へ向かう。サントリー上空で800まで高度をあげると濁った空気の層が真横に見えた。ここが逆転層のトップだ。それから丁寧にドルフィンで給水塔へ向かう。2km手前で高度650。このまま進むか迷ったが工場地帯に進路を変えてサーマルを探すことにした。サンヨー上空に到着するが高度を下げすぎたせいかなり渋い。広くサークリングしサージを感じた瞬間に全力で旋回半径を絞り回るが半周+1半周-1。それでも少し上がればプラスも強くなるはずだと工場の上でひたすら粘るが、高度をあげられないまま少しずつ風下に流されてしまう。ピストから高度を聞く無線が入る。400を切った。これ以上は無理か。R/Wに戻りながらサーマルを探す強いプラスにヒットしない、高度もない。最後の希

望をかけて水門奥を探りつつ場周に寄せるがノーヒット。高度200で場周に入り、低空進入。幸いピストから呼び出しは受けなかったが無様な着陸となってしまった。前田先輩は褒めてくれたが周回し切れなかった自分が不甲斐なかった。

この日は12選手が得点。7選手が周回していた。同志社の得点は1ポイントクリアの288点。

かくして、今年の同志社の挑戦は終わった。

同志社	4612点	団体14位
前田	3480点	個人16位
重田	1132点	38位

思ったようにフライトできず悔しい思いをしたシーズンだったが、全国では自分の技術の未熟さを痛感させられる結果となった。来年に向けて多くの課題も見つかった。それと同時に十分関東の強豪校とも渡り合えるのだと自信もついた。

全国最終日、寄せ書き風に各選手のコメントを集めたブルーサーマル最終号。私もコメントを書くように求められた。ふと東海6三番手の近藤選手のコメントが目に入る。

—来年は俺が勝つ！

彼も今大会ほとんど飛ばなかった選手の一人だ。私もこう書いた。

—もっとやれた。来年は負けない！

そうだ、来年こそは必ず雪辱を晴らす。

OB 応援団



中村 西山 樺島 宮原 末吉 梶田 豊浦
森川 大久保 斉藤

(敬称略)

6. クルーとして参加して

3年生 小寺 亮

今年も我が同志社航空部は二年連続となる全日本学生グライダー競技選手権大会に出場する。六年ぶりとなる前回の大会と比べ、知識、経験、機材、などは格段に向上している同志社航空部は、今年の全国大会では私としてはぜひとも参加して前田さん、重田さん、淳さんを背後からバックアップするとともに、来年度は必ず選手として出場したいこの自分自身の全国大会に対するモチベーションをさらに上げるために妻沼にやってきたのである。

さて、翔友会の伝統ある「翔友」の記事を書かせていただくにあたって何を伝えるのか。考えた結果、競技中の内容は選手の記事やホームページのブログに掲載されているのでここでは省略することにして、今回は私自身がクルーとして参加した際に感じたことや経験したことを述べさせていただくことにした。

今回の全国大会では選手・クルーが共に団結して一丸となって戦うことを同志社チームの唯一の行動原理とした。具体的には、上空の機体を見て何処に利用可能なサーマルが存在して、他校の機体が今何処で何分滞空しているか、今上空にはどこどこの大学の機体が浮かんでいるか、などを常に選手とクルーが一体となって協議をし、データを蓄積して、選手が発航前に欲しいとする情報がいつでも引き出せるようにした。そのおかげで同志社チームには「勝ちたい」という勝利への貪欲な希求力が選手・クルー共に全体に漲り、一つの完成された有機体として動くようになった。結果としては残念ではあったが、これからもこの一致団結して戦う姿勢は今後も継続させていきたい。

話は変わるが全国大会の妻沼では、「本当にグライダーパイロットとして今までの自分の全てが

試される」と前田さんから常々教えていただいたが、まさにこの言葉は真実である。ウィンチ曳航や風向風速などの気象判断や他機警戒、帰投・場周判断や、セントリング、クライム、グライドにおける一連の操作技術などが全てパイロット一人の判断に委ねられるのである。また競技会である以上それに加えて、いかに速く、効率よく周回して他校との点差を広げ、そして次のパイロットへバトンタッチできるかを考えなければならない。しかし、こんなことは選手あるいはライセンスである以上当然のことなのだが、まだソロ10発にも満たない私からしたらまだまだ私はヒヨッコであった。いつも選手諸氏のフライトを地上から見上げながら、自分ならどう判断して、無線を入れて、機体のヘディングを方向付けるかを常に頭の中でイメージフライトをして考えていたが、降りて帰ってきた選手の話の聞くとなかなかどうして先輩方のようにうまく対処できない自分いることに気づいたのである。先程全国大会に出たいと豪語しておきながら、この有様。今の自分の力に悲観はしたが、しかしながらこれからは今以上の勉強が必要だなと思って逆にモチベーションが向上したので、かえって良かったのかもしれない。

今回の全国大会は色々な意味で、私の今後の活動方針の決定付けをしてくれたと思う。正直今回のこの結果は悔しくてたまらないものであるし、2008年度はこの同志社航空部を窮地から救っていただいた長老の前田さんが卒業されて部に在籍されない。主将を務めさせていただく私にとっては荒波の航海になるかもしれない。しかし、この全国大会での経験のおかげで、私の中に「必ず成長して戻ってくるからな！待ってろよ！」と言わずにはおれない自分がいたのである。